

マインドトレイル

坂口立考

「旅人よ、前に道はない。歩いてはじめて道になる。前に歩いて、後ろを振り返った時、そこに小道がみえるだろう。しかし、その道を再び踏むことはできない。」今年の春先、古い友人との会話がきっかけでアントニオマチャードの、この詩の一節に再会した。三十年ぶりだった。自由に何かを創りたいとか、人のやらないことをしたいとか、私は「道を拓け」ということばに特別な憧れを抱いてきたので、この詩にふれた時の記憶をたどるのは易しかったが、「その道とは、もう一度踏みたくても踏めない、たった一度の足跡のことだ」ということばは、私の胸に痛切に響く、初めての出会いだった。人生は一度きりだ、などと云っても、過去の経験を懐かしく振り返るだけでは実感できない。いや、実感しながら生きることなど叶わぬことなのだ。だからこそ、もう一度歩いてみたい、と後からきつとそう思うような道をつくれ。それは今、夢中になって前に歩くことだ。そう聞こえる。

一年ほど前に私は、いつかアポットをつくりたい、と書いた。そばにいて、生き物のように自律的でありながら、私を知り、私のことばに耳を傾けてくれる小さな友達。命令に従う機械ではなく、人

間のように共感し、ともに暮らして私にそつと何かを気づかせてくれる。そしていつかは私の心の鏡になる存在。考えれば考えるほど、新しい時代のコンピュータの可能性と意義について私は確信を抱くようになり、アボットの構想と実現方法について真剣に取り組みたいという気持ちで湧いていた。既に私は自分自身と家族の生活を見直そうと思ひ立ち、長く経営の仕事に携わった会社から退くことを決めていたので、アボットに専念してみたいという思いは自然の流れにそうように思われた。

ところが、ことはそれほど簡単ではなかった。心機一転などといっても、長年堆積した諸々のことは頭の中から突然消え去ってくれどころか、忘れていたことまで次々に脳裏に浮かんでくる。感情の整理は一筋縄ではいかない。心の浄化作用には時間がかかるということがよくわかった。その過程で、何かを始めるためには、心の中で何かを終わらせる必要があることにも気がついた。「アボット」を書いてから半年ほどの間、私はその思いと考えを深めながらも、一方では自分の心の中からいらぬものを捨て去り、減衰していたエネルギーが回復してくるのを静かに待った。そして、自問自答を繰り返す時に平常心を保つ努力を心がけた。「そんな壮大な夢物語を今からひとりで行われるのか？」といった誰でも抱くであろう疑問にも、うかつな問いの立て方をするといらぬ心の動揺のもとになる。「人生は一度きりの道のり」などと言えば、あたかも一本のまっすぐなレールを自動的に進んでいくイメージになる。損得勘定や一般論的な判断から入ると、いちばん大切な問いが立てられない。私にとっていちばん大切なことは、夢中になって踏み出す一歩だ。何かに気づくためには、気づくための種がまかれていなければいけない。自分の姿を見つめ直すきっかけができ、心の状態が穏やかになってきて初めて、冒頭に書いた詩のことばが私の心にやってきた。人生一般などというものを考

えてはいけない。それはあらかじめ敷かれた一本の線路でもないし、時間の船に乗って川を下っていくのでもない。今、自分が未来に向かって歩けば、自分の足跡ができるだろう。それだけなのだ。それだけだからこそ、その足跡をたどりたくなくなるように歩きたい。その記憶がいつでもよみがえってくるような、そういう足跡になるように。

思うに、その足跡とは何かに気がつくことから始まるのだろう。私自身が気づきの土壌だ。自己とは何かなどというとなしくなるが、きっと私の記憶や意識の活動によってかたどられた中空部分のよくなものだと想像する。そして私とはむしろ、自己のまわりの、知情意の体験という陸地部分のほうだと思えてくる。私とは体験記憶の集積体であり、それが成長し変化し続ける持続体である。だから、何かに気づくことによって自分をもっと知る手がかりを得ることは、自分になることを学ぶ営みなのだ。そのために、気づきの種をまいておけば何かのきっかけで芽がでてくる。気づきの種とは、刻々と脳裏に浮かぶこと。瞬間瞬間に感じることに。思い出し、思いつき、思い返すこと。無意識に感じとっていることの情報量は意識の千万倍というが、その中に無数の種があるに違いない。そして、何かのきっかけとは、前に歩くということだと思う。動く変化によって何かが見えたり、聞こえたりする。その時に「ああ、そうなんだ」という内なる声が出て、想起や想像の火花が散り、さっきまでの自分と今の自分に新しいつながりができる。私とは、そのような記憶と意識の連続現象の場なのだ。

そう考えると、足跡とは、たどることのできる記憶と言えるのかもしれない。たどれる記憶を残すことであり、それをたどってまた新しい記憶をつくることだともいえる。たどることのできる記憶が過去なら、今のこの瞬間の思いが私の過去をつくる。過去を振り返る時に、時間を逆向きに思い出す

ことはできず、いつも前向きなのはなぜだろう。何度も繰り返す思い出すことほど私のあり方に影響するのはどうしてか。そういう経験則から察するに、今既に感じていること、思い続けていること、それらが積み重なってできた想像や願いが、未来の記憶をつくり、前に向かって歩くことで今ができる、と考えたらどうか。自分より前の方向にあることに想像力を働かせ、それをことばにし、今のこの瞬間に印をつけておくことができたなら、未来の足跡をつくれるはずだ。記憶とは、過去のできごとを覚えているということだけではない。刻々と涌き上がる意識の活動、感情の起伏、思い出したことから連想されたり、想起されたりするすべてのこともまた記憶になる。思いが記憶化され、意識化され、記憶の記憶が積み重なり、それが自分をつくる。きっとそれだけが「私」になっていくのだろう。

日常生活の些細なできごとの中に、気づきという宝物がちりばめられている。しかし、すべての瞬間を覚えておくことも意識することもできない。いつも記録しながら生きる、というわけにもいかない。何かを意識するためには、それ以外の意識をいったん遮断しなければできない。そもそも何に気がつくかということは予め知りようもない。そのとおりなのだ。長い記憶の反復をへて、この単純明快な事実気がついた時、私は自分の想像・創作であるアボットに、再びめぐり会った。

アボットは私とともにいて、私の頭に浮かんだことや感じたことをことばや表現で記憶に残していく。私といっしょに私の記憶と意識に印をつけ、想起させてくれる。足跡を残す愉しみ、たどる喜びを演出してくれる。だから、アボットは生きものの美しさや自然のゆらぎを体現して、そこにいる。ある時は光や音の揺らぎで、ある時はメタファーや手がかりとなるボディランゲージで、私に何かをそっと知らせしてくれる。アボットの頷きや囁きに誘われて、私はそれまで気がついていなかった小さ

なものにも目を向け、微かなことにも耳を傾けることができるようになる。思いだせて、気がつくということが、生きているという実感につながるように、アボットがそばにいて私を見守っている。

私は、記憶を残し、たどることがほとんど愉しくなるような体験、あるいはたどりたくなくなるような記憶の足跡を残す営みを「マインドトレイル」と名づけてみた。トレイルとは、山辺や丘陵地帯の細い小道をたどって自由に歩くことだ。うねったりくねったりする細い道をたどるために、五感すべてで記憶に印をつけながら歩くことと言い換えてもいい。トレイルは右に曲がり、左に折れ、前も後ろもないが、すべての道はつながっている。ざらついた大地を歩くときに聞こえる自分の足音に耳を傾けながら歩くトレイル感覚のように、細長くつながった記憶や連想の小道をもっともっと自由にたどれたら、どんなに嬉しいだろう。マインドトレイル。アボットがいたらできそうだ。

四十九歳の誕生日に、私は **Somnia** という名の会社を興した。アボットとマインドトレイルをするという不思議な愉しみを創造するために。それを私の未来の記憶とするために。夢中になって、その夢のきっかけを探求したい。そういう思いを名前に込めた。「感情や意識を記憶し、私といっしょに想像と気づきのループをうみだす、主客一体のヒューマナイズド・コンピューティングシステム」をつくろう。それをアボットが体現する。これは夢物語ではない。マインドトレイルを開発の設計思想にすえ、アートとイマジネーションとテクノロジーを融合させる。アボットが人間の記憶と意識・無意識からなる「半分身」になるように。私は創業とともに発明とデザインの特許を出願した。今この世に存在しないものとしくみをつくるフロンティアに、私の未来の足跡を残すために。